

生命の値段と生命の尊厳 第3世界から考える

| | |
|----------|---|
| 著者 | 武井 秀夫 |
| 雑誌名 | 現代生命論研究 |
| 巻 | 9 |
| ページ | 283-289 |
| 発行年 | 1996-01-31 |
| その他のタイトル | Seimei no nedan to seimei no songen: Dai 3 sekai kara kangaeru |
| URL | http://doi.org/10.15055/00005919 |

生命の値段と生命の尊厳

——第3世界から考える——

武井秀夫

はじめに

1993年8月も半ばを過ぎて、1つのショッキングなニュースが世界中を憤激させた。ブラジルでの「ヤノマミ大虐殺」のニュースである。それは、「領土」をめぐる金採掘人たちとの争いの末に、ヤノマミ族の集落が襲撃され、危うく難を逃れた数名のヤノマミが当地の国立インディオ基金（FUNAI）の現地事務所へ救援を求めてきた、というものであった。逃れてきたヤノマミたちのポルトガル語が片言程度のもだったことや、ヤノマミの数の概念が1、2の次は「沢山」であることなどから、殺されたヤノマミの人数についてはほんの数名というもののから、70名以上というもので、さまざまな憶測が乱れ飛び、大騒ぎになった。しかし、こうした騒ぎの常か、事件が国境地帯で起こり、下手人も特定されず、死者の数も16名であったことが分かると、この問題はマスコミの表舞台から早々と姿を消していった。

私が初めてアマゾンに足を踏み入れたのは1986年のことで、コロンビアのブラジルとの国境沿いの地域であった。私の主調査地となったティキエ川流域では、82年から84年にかけて結核の流行があり、2つの集落が壊滅し、総人口600人程度と推定されるこの地域で私の知り得た限りで30人を超える犠牲者が出ていた。人口の5%である。しかし、こうしたことも事件として報じられることはまずない。「この程度」のことでは何のニュース・バリューもないのだろう。だが、ティキエ川流域の結核流行の最大の要因は、人々がコカイン経済に巻き込まれ、多数がコカイン耽溺に陥ったことにあった。だから、それは決して虐殺と呼ぶような性質のものではないにせよ「外部世界」、私たちが「文明」と呼び、「先進国」と呼ぶ世界の力によってもたらされた死には違いないのである。

殺された者が「たったの16名」だったという理由で関心を持たれなくなってしまうヤノマミ、地域住民の5%が短期間に死滅しても、ニュースにさえならないアマゾンインディオ。そうした現実からも、世界中の飢えた人々とも、戦争下に生きる人々とも切り離されたままで、私たちはどのようにして生命の尊厳やかけがえのなさについて論じることができるのだろうか。第3世界のさまざまな事例が私達に示しているのは、私たちが生きている世界の論理が「生命の価値の普遍性」と言う観念を否定するものであるということである。

では、「生命の価値の普遍性」という観念はもはやその有効性を失ってしまっているのだら

うか。私は、本稿で、第3世界の現実からもう一度この問題を考え直してみたいと思う。

生命の値段 ― 日常的現実 ―

人間の生命の価値の重みが地球に匹敵するかどうか、などと考えるまでもなく、私達の日常において1つだけはっきりしていることがある。それは、人間の生命には値段がある、あるいは、私たちが1人1人の人間の生命に値段が付けられた世界に生きているということである。

事故などの際、過失責任を問われた「加害者」に「被害者」の遺族が請求する補償の額は被害者の職種、賃金、学歴などによって大きく異なる。これは逸失利益の補償という形で、被害者が平均余命まで生存した場合に得たであろう生涯賃金が推算され、それによって請求される額が決まってくるからである。

同じ考え方を基礎とするものに生命保険がある。「生涯保障プラン」と称する保険では、その時点での職種、賃金、勤務先の賃金体系などをもとに、実にあっさりとして1人の人間の生涯賃金＝生命の値段を計算してくれる。そして、例えば私が、不慮の事故や、病気で死んだ場合に、家族にこの生涯賃金と同程度の収入を確保するためにはいくらの掛け金が必要かを教えてくれるという寸法である。ここで、私の生命の値段は、私の家族の生命の値段にもなっている。

ところで、人間の生命の値段は、丸ごと1個の生命として値段が付けられているだけではない。身体の部分にもさまざまな値段が付けられている。臓器移植の場合、心臓や肝臓などの移植臓器の売買は概して禁じられており、値段はないことになっているが、血管、皮膚、骨などを加工した材料は商品化されていて、値段が付けられている。だが、そうした商品が生まれるよりずっと以前から、労働災害の補償には足1本いくら、腕1本いくら、両方ならいくら、片目がいくら、両眼失明がいくらといった具合に値段が付けられている。私たちは事故などで身体の一部を失ったとき、自分の身体その部分がいくらの値打ちのものだったのかを知ることになるわけである。こうした身体の値段はかなり徹底していて、身体障害者への給付金などにも似たようなランク付けがある。

こうして「先進国」社会に住む私たち1人1人の生命には、その部分に至るまで細々とした値段が付けられている。病気もせず、怪我もせず、事故にも遭わず、失業もしなければ、いや、ついでに保険の勧誘にも会わなければ、自分の生命にこれらの値段が付けられていることを自覚せずに済むかも知れないが、そんな幸運な(?)人がどれだけいるだろうか。ガンなどといわずとも、ほんのちょっとした病気で入院でもしようものなら、ベッドの差額というような形で、否応なしに自分の生命の値段を自覚させられるのが私たちの社会なのだ。

こうした私たちの社会の現実的基準に即して前述のヤノマミやティキエ川流域の先住民の生命の値段を概算してみるとどうなるだろうか。例外的少数者(教師、保健所員など)を除けば、彼らはほとんど現金収入というものを持たず、平均余命も短いので、生涯賃金の計算という観念そのものが成り立たないくらいである。なんらかの給与を得ている例外的少数者たちですら、年収10万円を超える者は多くない。彼らが20才から60才まで働いたとしても、彼らの生命の値段が500万円を超えることはない。似たような事情は第3世界の貧困層の人々のほとんど

にも当てはまるであろう。先進国社会でいかに臓器売買が禁止されようと、職を得る当てすらないような人々にとって、例えば、腎臓1個10万円、あるいは20万円という値段はそうとうに魅力的なものなのである。

生命の妥当な対価

繰り返して言うが、丸ごとであれ、部分であれ、生命に値段を付けるシステムは先進国社会に広く浸透している。生命の価値を金額で表すシステムを持つということが、先進国においては普遍的なのである。つまり、生命に付けられた値段の多寡で生命の価値に差を付けることを、日常的現実として受け入れている社会に私たちは生きているのである。

しばしば誤解されたうえで、残酷な刑罰の代表として言及される「目には目を」というハムラビ法典も、身体の代価という点では、私たちのシステムより原理的にずっと妥当であるかも知れない。もちろん、損なわれた身体の代価として「目には目」を要求することの社会的損失や、この原則に従った場合の刑罰の残酷性などを考慮した場合、どちらがより妥当なのかについては議論の余地があるという留保を付けた上でのことだが。

しかし、現実への適用をどうするかはともかく、生命が真に掛け替えのない普遍的な価値を持つのであるとするならば、1個の生命の対価として妥当であり得るのはもう1個の生命ということになるであろう。このことの論理的帰結は、1個の生命の尊厳性に制約を加え得るとすれば、その際に妥当な根拠とされ得るのは他の生命の尊厳性との関わり、ないし比較においてのみでなければならないということである。少なくとも、掛け替えのない普遍的な価値に値段を付けることはできないはずである。

生命の値段 ―― 第3世界にて ――

ここでは、第3世界における生命の価値のあり方について、いくつか具体的な例を挙げながら考えてみたい。

(1) 片足を切断した娘

これは私の友人の生物学者の経験である。彼は、絶滅が懸念されているアマゾン川のある支流の水棲のカメの生態を研究中で、すでに数年にわたってフィールドワークを実施してきており、このフィールドワークの基地にしていたインディオ集落の家族たちとは親交を結んでいた。ある年、彼がここを訪れると、首長の末娘が毒蛇に噛まれて寝ていた。見ると、すでに数日を経過した足は、噛まれた部分を中心に広範に壊死を起こしており、そのまま放置すれば確実に敗血症を起こして死ぬと思われた。友人はセスナで町の病院へ運び治療しようと提案したが、父親は、治療が足を切断することだと知るとこれに反対した。切断しなければ死んでしまうと説明しても、それならそれを受け入れるしかないのだとの答えであった。

結局、友人は親たちの反対を押し切って娘を病院に運び、壊死した足を切断して生命は取り

留めた。回復した娘を連れ帰ってみると、父親は友人に「なぜ、連れて帰ったのか」と問い詰めた。片足がなくてはセルバ（ジャングル）の中では生きられない。一人前の女の仕事ができない彼女と誰が結婚したがるだろうか。私たちが生きている間なら、私たちが面倒を見ることもできるが、私たちが死んだら、彼女は どうやって生きていくのか。町でなら足を切断しても生きられるかも知れないがここではそうはいかない。お前が娘を町へ連れて行って足を切断したのだから、私たちは、これから先はお前が、町で、娘の面倒見るのだと思っていた。ここへ連れ戻すつもりなら、なぜ私たちの反対を押し切って娘を連れていったのか、と。

アマゾンのインディオ社会では、男女の間に明確な性的分業が確立している。成人し、結婚した男女は、各々の役割を果たすことなしに一人前とは見なされない。女は男たちが作ってくれる焼畑でマニオック栽培を行い、家族の主食を確保し、子どもを生むことを期待される。焼畑は集落から徒歩で15分ないし1時間程度までの距離にあり、女たちは毎日出かけて行っては、マニオックや果実、薪など20キロを超える荷を、マニオックはカゴで頭から背負い、薪は頭に載せて帰ってくる。乳のみ子がいれば、焼畑への行き帰りは抱え帯をたすき掛けにして抱いて歩く。たいへんきつい労働だが、毎日これができてはじめて、アマゾンの女性は一人前なのである。

労働のきつさは女たちだけではない。確かに、鉄斧、金属製の釣り針、散弾銃が石斧、骨の釣り針、弓矢や吹き矢に取って代わり、懐中電灯も使うようになって、男たちの仕事の能率は劇的に改善された。しかし、焼畑を切り開き、家を建て、家族の蛋白質食糧を確保するという男たちの仕事は決して楽ではない。魚も肉もなくなれば、風邪を引いていようと、熱があらうと、下痢をしていようと、また、雨だろうと、星も見えない夜だろうと、男たちは魚取りに、狩りに出かけていく。

女であれ、男であれ、彼らは、自分たちの労働に家族全員のサバイバルが掛かっていることをはっきりと自覚している。彼らが細々とした宗教的タブーや社会規範を日常生活の中でおろそかにしないのは、それもまた、彼らのサバイバルを左右すると考えられているからである。

問い詰められた私の友人は、言葉を失ったという。「それなら、あのまますすみす見殺しにすればよかったのか」とは言えなかった。そして、あらためてアマゾンに生きるということの意味を考えさせられたという。

さて、この娘の生命は親たちによって軽視されたのだろうか。それとも、アマゾンという生活環境の過酷さが、生命の尊厳など意味のないものになっているのだろうか。

（2）小児麻痺の少年

私の最初の調査地となったインディオ集落には、小児麻痺の後遺症が強く残った少年が1人住んでいた。右足は普通よりやや細いという程度であるが、左足の変形と筋の萎縮は顕著で、膝を突っ張った状態でないと体重を支えられない。しかし、跛行し、ゆっくりながらも走ることもでき、ほかの子どもたちとサッカーをすることもできる。もちろん、早く走れるわけでもなく、競り合いに強いわけでもないけれど、器用に腰を使って、変形した左足で蹴るボールは、

予想したよりもはるかに早く、遠くまで飛ぶ。一緒に遊ぶ少年たちも彼を特別扱いはいしない。

一度彼と一緒に焼畑を切り開きにいったことがあるが、細い身体をうまくしならせて斧を振るい、他の少年たちと比べてもそれほど遜色がない。都市生活者の私など足元にも及ばない。釣りもなかなかの腕前である。

この少年の場合、身体の障害が生まれつきのものではなく、病気によることと、男子としての生活技術をきちんと身につけていることから、集団内で何等差別的な扱いを受けていない。彼が男子であり、マニオックの収穫をすることを期待されてはいないからである。

もし彼が女子だったらどうであろうか。おそらく、片足を切断された娘と同様の問題を抱えることになったのではないと思われる。だとすると、この2つのケースはアマゾンにおける性差別を示しているのだろうか。

（3）足の切断を拒否した母親

上記2つのケースが示している問題を明確にするために、もう1つの例を挙げてみる。これは大井玄氏から聞いた例である。

ネパールの農村の最貧層の農民の母親の話である。彼女は、足に皮膚ガンができて、医師からその足の切断を進められたが、彼女はそれを拒否し、手術せずにガンで死ぬ方を選択したというのである。彼女には夫と6人（だったと思う）の子どもがあり、もし、彼女が足を切断して働けなくなれば、家族全員共倒れになるリスクが大きいので、手術せずに働き続けることを選んだのであるらしい。

手術をすれば容易に生命を取り留めることができるにもかかわらず、こういう選択をした彼女は愚かなのであろうか。彼女にとって、自己の生命の尊厳は取るに足らないものだったのだろうか。そうではない。彼女にとって、家族の生命を犠牲にしては、自分の人生を全うしたことにならないのである。だから、家族の生命を犠牲にするような選択は、彼女の尊厳を傷つけるものなのである。

この例で示されているのは、彼女の生死の懸かった選択において、最終的な選択を促したのが、自己の生命と家族の生命の重さについての彼女の判断だったということである。つまり、ここで生命の対価となり得たのは生命だけであったということである。

上記2例についても同じことが言える。足を切断された娘の場合、彼女の親たち、とくに、私の友人に「なぜ娘を連れ帰ったのか」と問い詰めた父親にとって、娘の生命の尊厳とはどういうものだったのだろうか。友人にとっては、明らかに、あの時点で娘を見殺しにしないことが娘の生命の尊厳を尊重することであった。だが父親にとって、娘はまずアマゾンに属する人間であり、それ故、娘がアマゾンで生きることができかどうかは何より問題だったのである。足を切断された娘が仮に結婚できたとしても、彼女がインディオとして生きる限り、自己の役割を果たせない彼女は、家族の生存を常に大きなリスクに曝さねばならない。家族の生命に対する責任を全うできないということは、彼女の尊厳を大いに傷つけるに違いない。父親はそうした生を娘に強いることを拒否したのである。ここでも判断の基準となっているのは、生命の対価は生命であるということである。小児麻痺の少年の場合、そうした他の生命に対する責任

を全うできる能力を何とか身につけることができたという点で娘の場合とは異なるが、基本的な問題の構造は同じである。もし彼が、小児麻痺ではなく、怪我で両手の親指をなくしてしまったとしてみよう。彼は、焼畑での女の仕事は何かこなせても、男たちに期待される仕事はほとんどできないであろう。その場合には、彼もまた彼女と同じ問題を抱え込むことになるのである。

調査地で知り合った1人に、右腕をなくしたインディオの男性がいた。彼は、公務員としての給与で人を雇い、焼畑を作らせ、食糧を買うことができたが、彼が現金収入なしにインディオ集落で暮らしていたとしたら、大きな困難を抱えたであろう。

共に生きる発想と他者の生命を食うシステム

さて、前段で紹介したアマゾンの例から、アマゾンの社会はなんと非情な社会なのだろうと思われる読者がいるかも知れない。だが、それは決してそうではない。彼らの文化や社会規範には、むしろ、共に生きる、共に生き残る発想がさまざまな形で浸透している。生命の対価を生命以外にないと考えていることもその現れの1つなのである。

自己の生命と他者の生命を対等なものとして措くことなしには、「共に」という発想は現実的有效性を持ち得ない。ここで例として挙げた北西アマゾンのインディオ社会では、食糧の分配について厳しい社会規範があるのが一般的である。魚を多く取った者は必ずその一部を共同体全員に分配する。他集落から訪れた者には、挨拶の後で必ず食事が振る舞われる。そして、こうした規範に従わず、食糧を出し惜しみする者、他者に分け与えない者は、相手に対して最悪の敵意を持つ者と見なされる。こうした規範とそれに基づく行動は、社会的紐帯を強化すると同時に食糧不足によるリスクをも平均化することで、人々が共に生き残ることに貢献するのである。この規範において、自己の生命と他者の生命がまったく対等なものとして措かれていることは説明するまでもないであろう。

こうした社会に生きる人々にとって、「娘を見殺しにする」選択は決して非情から出てくるのではない。父親は、彼女と共に生きることを否定したわけではない。父親が憂慮したのは、自分の死後、人間としての尊厳を傷つけられることなしには生きていけなくなる娘の生であった。彼自身は、むしろ、娘が生き延びた場合には、自分の生命がある限りあらゆる犠牲を払っても娘と共に生きていくつもりだったのである。その父親が、前述の選択をしたのである。人々にこうした非情な選択を迫るもの、それは、環境としてのアマゾンの厳しい生存条件であり、長くそこに生きてきた人々の歴史なのである。

しかし、このように理解したところで、納得できない部分はどうしても残るであろう。彼らの間では、明らかな障害を持って生まれた子供は、人目に触れぬようにその場で殺され、埋められてしまうといわれている。以前は、父親の知れない子供も同じであったという。このことも一緒に考えれば、差別される生命はやはり弱者の生命である、ということになるからである。ここで私は、最初の問題、「生命の価値の普遍性という観念の有効性」という問題に戻ったことになる。

はじめに述べたとおり、私たちの社会は、人の命に値段による差が付けられている社会である。殺人に対する刑法の規定等は「生命の価値の普遍性」に対応しているといえるのかも知れないが、少しでも経済が絡めば、そこに普遍的な価値を見いだすのは不可能である。値段には大きな格差が存在するからだ。

ここに挙げた第3世界の例では、少なくとも生命の対価は生命であるという原則が機能してはいるが、やはり差別が存在しているということだ。ここで考察されねばならないのは、極限状況に近いレベルの状況であれを取るかこれを取るかといった問題ではない。そうではなくて、生命の対価は生命という原則の働く場を何が狭めているのかということである。それは、私たちのシステム、生命に値段を付けるシステムである。

例えば、私の生命に数千万円の値段を付けてくれるこのシステムは、私の掛け替えのない友人のあるインドには数百万円の値段も付けないであろう。この同じシステムは、国際通貨制度という別の姿で人々の労働の産物にも差別的な値段を付け、私たち先進国に生きる者たちに世界中から富をかすめ取ってくれる。労働の質という概念はこうしたシステムの正当性を保証してはくれるだろうが、このシステムの末端、世界の最貧部でほとんど詐欺としかいいようのない形で人々から富が奪われるのを正当化しはしないだろう。

生命の尊厳という視点から福祉を考え、医療を考え、それに伴う資源の再分配を考えると、私たちはもはや日本、あるいは先進国社会というコンテキストで考えることによって普遍的倫理性を確保できないのである。老人医療費が1人当たり数十万円消費される一方で、同じ数十万円の不足のために、1000人単位の子供があるいは予防接種を受けられず、あるいは餓死に貧しているという現実の中に私たちは生きている。私たちにはお金があり、彼らにはないという2つの現実、互いに孤立しているのではなく、つながりあっている。生命に値段を付ける私たちのシステムは、値段の高い生命が安い生命を食ってもいいという、他者の生命を喰らうシステムでもあるのである。

第3世界の人々にとって生命の対価が生命であるということの根源には、彼らが自己の生命の尊厳を自己を含めた家族や集団のサバイバルという基準で考えていることがある。このサバイバルという基準は、一方で「共に生きる」社会規範を導くものであると同時に、彼らに、生命の差別を強いるものでもある。

サバイバルへの圧力から大きく解放されたはずの私たちの社会では、彼らのぎりぎりの選択を野蛮、愚昧と見る一方で、生命の価値の差別が普遍的になっている。サバイバルへの圧力からの解放は、私たちを「共に生きる」発想からも解放してしまったように見える。今、生命を考え、生命の価値に再びそれに相応しい普遍性を取り戻すためには、第3世界の人々の生命を私たち自身の生命として、もう一度、ともにサバイバルするという視点から考え直す必要がある。確かに、サバイバルへの圧力からの解放は、論理的には、生命の差別からの解放につながりうるかも知れないが、サバイバルを忘れた論議は、私にはたいへん空疎に響くのである。